

雑誌『平和』をめぐる人々

——「日本平和会」の新史料とともに——

坂 口 満 宏

People surrounding “Japan Peace Society” and their
historical documents

はじめに

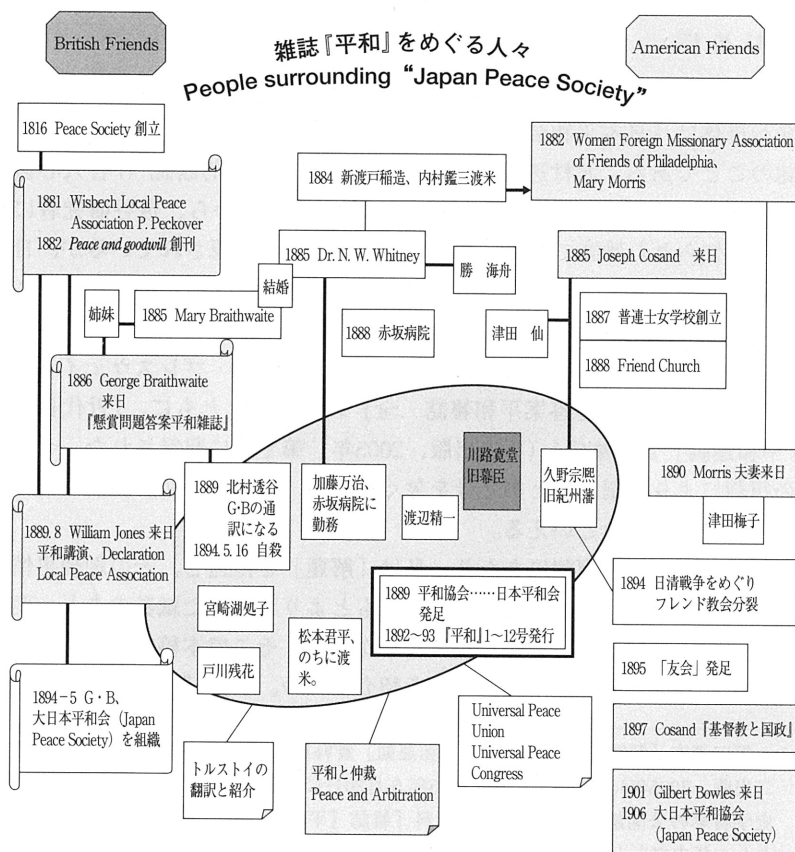
ここにいう雑誌『平和』とは、1892～93年にかけて平和社（実質的な発行母体は「日本平和会」）から発行された日本最初の「平和」主義雑誌のことである。北村透谷が主筆となり、彼の代表的論説（「各人心宮内の秘宮」「心池蓮」など）が収録されていたことから、透谷研究者には特に知られた雑誌である。第12号までの発行が確認されているが、日本国内の研究機関に現存するのは創刊号と第2号を欠いた第3号～第12号のみで、そのすべては同志社大学人文科学研究所に所蔵されている。2005年この同志社本から復刻版が作られ、ジョージ・プレスウェイトが発行した『平和問題答案平和雑誌 全』の復刻版とともに、『近代日本「平和運動」資料集成』（不二出版、2005年）第1巻に収録された。今回の復刻により、創刊号と第2号を欠くものの、雑誌『平和』の隅々までが明らかになったといえる。

雑誌『平和』の復刻にあたり、私は「解題」を担当し、その創刊事情から終刊にいたる経緯を概観したが、もとより限られた紙数のこと、関係史料を十分に盛り込むことができなかった。そこで本稿では、アメリカやイギリスに残された関係史料を紹介しつつ、雑誌『平和』の発行母

1 坂口満宏「解題」（『近代日本「平和運動」資料集成』「解題・総目次・索引」不二出版、2005年）。なお、本稿は2005年5月20日に開催された京都女子大学文学部史学科春の公開講座における講演資料「雑誌『平和』をめぐる人々——「日本平和会」の新史料とともに——」を加筆・修正したものである。

体であった「日本平和会」の創立事情から活動の停滞、雑誌『平和』の終刊事情を再検討する試論と論拠を提示したいと思う。分析の視点は、19世紀半ばから20世紀初頭にかけて欧米で進められていた「平和と仲裁」Peace and Arbitrationという平和運動に日本で発行された雑誌『平和』と「日本平和会」の活動を位置づけてみることである。図1は、本稿の主題にかかわる人々の関係図である。本稿ではこの図にでてくる人物のすべてについて言及する余裕はないが、今後、こうした人々と「日本平和会」との関わりについて深く掘り下げてみたいと思っており、本稿はその前提作業に位置するものである。まずは19世紀から20世紀初頭の欧米における平和運動・平和思想から概観してみよう。

図1



1 19世紀欧米の平和運動——「平和と仲裁」Peace and Arbitration

イギリスの平和協会 The Peace Society

1815年ナポレオン戦争が終結したが、25年間におよんだこの戦争で210万余りの戦死者がでた。こうした悲惨な戦争を繰り返してはならないとして、1816年6月14日ロンドンに発足したのが「恒久的世界平和促進協会」(The Society for the Promotion of Permanent and Universal Peace、通称 The Peace Society「平和協会」)である。平和協会は「戦争はキリストの精神と人類の本当の利益と矛盾するものである」(War is inconsistent with the spirit of Christianity and the true interest of mankind)を信条としていた。メンバーはみなイギリス社会の中産階級で、チャーティストのジョウジフ・スタージもその一員であった。1822年に機関紙*The Herald of Peace*を刊行、1843から53年にかけては一連の万国平和会議の開催に尽力していた。1870年普仏戦争が勃発すると平和協会はイギリス政府の中立主義を支持するとともに、徴兵制度に反対する活動も行って²いた。

平和協会を支える地方平和協会 (Local Peace Association)

1870年代になるとこうした平和協会の活動を支援しようとする団体がイギリス各地にできはじめた。その中核となったのが1879年12月4日、プリシラ・ベックオーバー (Priscilla Hannah Peckover) を中心にして設立された女性地方平和協会 (The Women's Local Peace Association) である。その基本的な立場は「私は、全ての戦争と戦争の準備はキリストの意思、すなわち“あなたの敵を愛しなさい”、“あなたを憎む者に親切にしなさい”と説いたそれに反するものだと思います。そして私は平和主義を促進する取り組みに尽力したいと思っています」(I believe all war, and the preparation for war, to be contrary to the mind of Christ, who says: “Love your enemies,” “Do good to them that hate you”; and am

2 Official Report of the Fifth Universal Peace Congress held at Chicago, United States of America, August 14 to 20, 1893, The American Peace Society, Boston, pp.58-59.

desirous to do what I am to further the cause of Peace.) との「宣言」に集約されていた。

その後、女性地方平和協会はイギリス各地に組織された平和協会とも連絡をはかり、1881年には男性の組織である労働者平和協会 (Workmen's Peace Association) と合同し、「ウィズビーチ地方平和協会」(Wisbech Local Peace Association) と改称した。

労働者平和協会と合同したことに伴い新たに3つの活動目的が加えられた。その筆頭が「1. すべての国際紛争を仲裁によって解決すること、そしてその仲裁を目的とした国際高等裁判所の設立を提言します。」(1. —To advocate the settlement of all International disputes by Arbitration and the establishment of a High Court of Nations for that purpose.) という「仲裁」という手段による平和活動宣言であった。ここにおいてウィズビーチ地方平和協会は、単にキリスト者としての信条にもとづく平和活動から「仲裁」という手段に裏付けられた国際高等裁判所の設立という具体的な活動目的を獲得するにいたった。そしてその取り組みは、逐次、機関誌*Peace and goodwill*を通してイギリス各地はもとより、地方平和協会と連携する欧米各地の平和団体に発信されていった。³

「平和と仲裁」— 仲裁裁判という方法

地方平和協会の活動目的に常設的な「国際高等裁判所」や「仲裁裁判所」の設置という具体的な課題が掲げられたのには根拠があった。それは1870年代以降の欧米にあって、二国間の紛争を処理するには戦争という実力行使にでるのではなく、第三者を間に立てた裁判で裁定することが最も理想的であると考えられるようになったことによる。その模範的裁判とみなされたのが、南北戦争時のイギリスの中立義務違反を問うたアラバマ号事件裁判 (1874年判決) であった。

この裁判は、当事国のアメリカ、イギリスから各一名、イタリア、スイス、ブラジルの元首が各一名の裁判官を指名し、スイスのジュネーブに開かれた。裁判長はイタリア選任の裁判官、法廷は第三国の国民を中心に構成され、彼ら主導のもとに厳正な書面審査と口頭審理が進められ

3 ウィズビーチ地方平和協会の発足経緯については*Peace and goodwill* 第1号 (1882年4月) による。

た。判決は四対一でイギリスの中立義務違反を認定し、賠償金の支払いを命じるもので、イギリスもこれを受諾するというものであった。

これ以降、この裁判はその後の国際仲裁裁判のモデルと目されるようになり、仲裁裁判を義務化するための裁判条約が数多く締結される契機となった。1875年（判決の翌年）には万国国際法学会が発足し、同学会は1877年の決議において、通常の条約のなかにも「その条約の解釈および適用に関する紛争」を仲裁裁判に付するための規定、いわゆる裁判条項を設けるべきだと勧告するにいたった。しかし、仲裁裁判はその都度、両国の仲裁協定によって具体的な法廷を設置しなければならず、法廷の構成等をめぐって両国の意見の一致がえられないときは、たとえ条約上の義務があっても裁判は実現しないという問題があった。⁴

ここに地方平和協会がその活動目的として常設的な「国際高等裁判所」「仲裁裁判所」の設置を求めようとしたゆえんがあった。仲裁裁判を義務づけた多国間条約を制定し、互いに加盟することで紛争処理に向けた国際的秩序を樹立しようとしたのである。その「実現」は1899年ハーグに開かれた万国平和会議まで待たねばならなかったが、イギリスやアメリカの平和協会や平和団体は、ともにこの「仲裁裁判」体制（「平和と仲裁」Peace and Arbitration）ともいえる新たな国際秩序の樹立をめざし、各種平和会議を積み重ねていくことになった。そうした平和運動の波がウィリアム・ジョーンズの来日とともに日本にも到来するのである。

2 ウィリアム・ジョーンズの来日と日本平和会の発足

——英文史料による新たな解釈

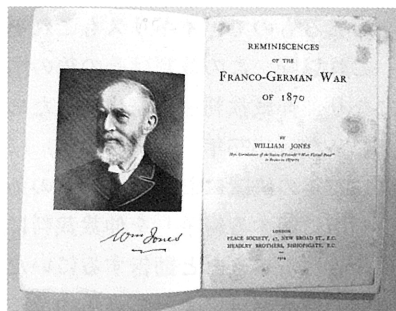
ウィリアム・ジョーンズの平和活動と来日

ウィリアム・ジョーンズ（William Jones、1826～1899年）はウエールズに生まれた熱心なクエーカーであった。英語はもとより、フランス語、イタリア語、ドイツ語に精通していた。1870年、普仏戦争が勃発するとジョーンズはロンドンのフレンド派（The Society of Friends）によるフランスへの救援物資搬送員に任命され、食糧や生活物資の搬送とともにフランス国内の戦場を視察することとなった。その詳細な見聞記は後に

4 杉原高嶺『国際司法裁判制度』（有斐閣、1996年）10～17ページ。

彼の自叙伝*Quaker Campaigns in* 写真 1

Peace and War (London, Headley Brothers, 1899) にまとめられ、その一部（75ページから186ページ）は第一次世界大戦が勃発した1914年、ロンドンの平和協会によって *Reminiscences of the Franco-German War of 1870* (Peace Society, London, 1914)



として復刻され、広く読まれた（写真 1 参照）。1881年には平和協会の会員勧誘員（Collector）となり、1885年から1888年にかけては平和協会の書記（Peace Society Secretary）として活躍し、ウィズビーチ地方平和協会の会合にもたびたび参加していた。⁵

平和協会書記時代の1887年、ジョーンズは初めてアメリカを訪問している。9月23日クリーブランド大統領に面会し、英米間に「仲裁条約」を締結することと仲裁を目的とした国際高等裁判所を設立することの意義を説いていた（11月1日には大統領と2回目の会談をもっていた）。その後ジョーンズはインディアナ州リッチモンドに開催されたアメリカ・フレンド派の年会に出席し、年会後に開催された平和会議において英米間の恒久的な「仲裁条約」の締結を促す報告をおこなっている。⁶

1888年平和協会を引退したジョーンズは、同年9月キャサリン・ウィルソンと再婚、10月にはその結婚旅行もかねて「平和と仲裁」運動を推進するため世界一周旅行にでた。同年11月オーストラリアのメルボルンで開催された第1回フレンド派植民地間会議（The First Intercolonial Conference of “Friends” in Australia）に参加し、その後オーストラリア、ニュージーランドの主要都市で平和協会の活動を訴えている。その後中国と日本をめざしたジョーンズは1889年7月10日 天津にて李鴻章と面会し、イギリスやアメリカで進められている仲裁条約の締結と仲裁裁判所の設立について説き、理解を求めた。その模様は彼の自叙伝

5 Paul Laity, *The British Peace Movement 1870–1914*, Clarendon Press, Oxford, 2001, p.115. なお、勝本清一郎によればジョーンズの平和協会書記時代は1883から1888年までとある（『透谷全集』第3巻、693ページ）。

6 *Quaker Campaigns in Peace and War*, pp.263–266, 278–280.

*Quaker Campaigns in Peace and War*に詳しい。

その後ジョーンズ夫妻はいったん上海に戻り、日本行きの船に乗りかえ、夏真っ盛りの神戸に上陸、そして汽車で東京へ向かった。ジョーンズの来日はイギリス聖書協会の職員ジョージ・ブレスウェイト (George Braithwaite) の招きによるものであった。8月5日東京に着いている。12日フレンド教会の宣教師ジョセフ・コサンド (Joseph Cosand) とともに条約改正交渉の最中にあった大隈重信外相を訪問し、仲裁条約の意義を説いた。黒田清隆首相とは面会でできなかったが、榎本武揚文部大臣とも対面している。⁷大隈と榎本と面会したことの記録は、先のクリーブランド大統領、李鴻章たちのサインや印章とともに、ジョーンズが持参した署名簿に残されている。⁸そして8月19日、東京の明治会堂 (厚生館) にて日本で最初といわれる「平和講演」をおこなった。その速報は『基督教新聞』第318、319号に掲載された。講演前、ジョーンズ夫妻はブレスウェイトとともに江ノ島に舟遊びに出かけ、8月22日日本を離れた。そして1889年9月アメリカを再訪し、フィラデルフィアでジョージ・ブレスウェイトの義兄ウイリス・ホイットニー (Dr. Willis Norton Whitney) と面会している。

もとよりジョーンズの自叙伝*Quaker Campaigns in Peace and War*の訪日記事には日付が記載されていない。ここに記した日付はつぎにみるジョージ・ブレスウェイト書簡とジョーンズによる通信文から補ったものである。以下、このブレスウェイト書簡とジョーンズによる通信文を対比しながら、つぶさに検討してみよう。

ウイリアム・ジョーンズの来日と平和活動 ― 英文史料による新事実

近年、ジョージ・ブレスウェイト資料に関する研究が急速に進んできた。その先駆けは黒木章による一連の資料紹介と翻刻であり、尾西康充

7 *Ibid.*, Chapter XVIII – XXII.

8 *Ibid.*, pp.84 – 85.

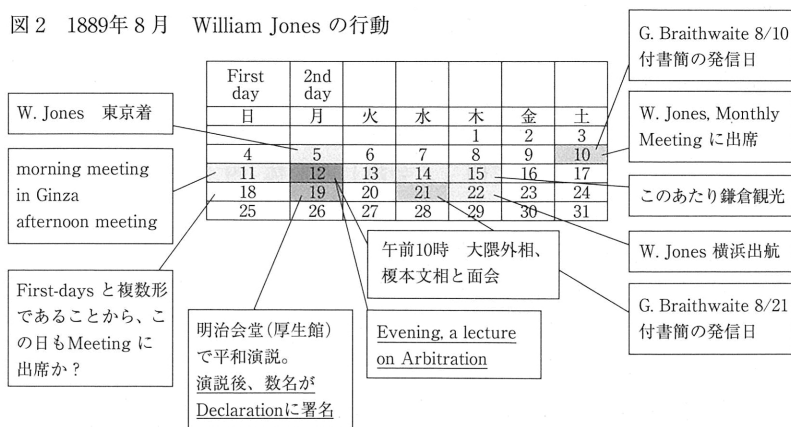
の研究も新たな水準を示している。⁹ いずれもロンドンのクエーカー・ライブラリーが保管するジョージ・プレスウエイト資料を紹介するもので、とりわけ黒木の研究はジョージ・プレスウエイト資料を英文のまま翻刻して紹介しており、ジョージ・プレスウエイトに連なる人々の他の記録との対比や参照を可能とした点で画期的な研究といえる。そこで以下では黒木章が翻刻・紹介したジョージ・プレスウエイト書簡とウィリアム・ジョーンズの報告書を対比させ、ウィリアム・ジョーンズの日本における活動の意義を再検討することにした。まずは史料1「George Braithwaite書簡とWilliam Jonesの報告書」である（本稿末尾「史料編」参照、以下同じ）。

これは、ジョージ・プレスウエイトが母マーサ（Martha）に宛てた1889年8月10日（土）付書簡のうちウィリアム・ジョーンズの東京での予定を記した個所と*The Friends*（1889年10月1日号）に掲載されたウィリアム・ジョーンズの報告書「Extracts from letter by William Jones」（1889年9月9日、サンフランシスコで投函されたもの）から抜粋し、対比したものである。あわせて史料2「1889年8月21日付妹Kittie宛てジョージ・プレスウエイト書簡」も引用しておこう。

史料1と史料2をもとに1889年8月のジョーンズの行動を図解すると以下ようになる。

9 黒木章「透谷がGeorge Braithwaiteに雇われた経緯とWilliam Jonesの平和講演会のこと—George Braithwaite資料の翻刻と紹介Ⅰ—」（『聖学院大学論叢』第16巻第1号、2003年）、同「1887年夏 ジョージ・プレスウエイトの東北地方旅行日記—George Braithwaite資料の翻刻と紹介Ⅱ—」（『キリスト教と諸学』第20号、2005年）、同「1887年 ジョージ・プレスウエイトの九州・中国地方旅行日記—George Braithwaite資料の翻刻と紹介Ⅲ—」（『聖学院大学論叢』第17巻第3号、2005年）。尾西康充「北村透谷とG・プレスウエイト—ロンドン・クエーカー図書館所蔵資料から—」（北村透谷研究会編『北村透谷とは何か』笠間書院、2004年）。

図2 1889年8月 William Jones の行動



史料1の読みどころは「仲裁」(Arbitration)と「宣言」(Declaration)という二つのキーワードにある。この2語に着目するとまずは8月12日(月)午前10時、ジョーンズがコサンドとともに大隈重信外相と面会し、「平和と仲裁」運動への取り組みを語ったこと、そして同日の夕刻、麹町での集会に赴き、そこでも「仲裁」について講演したことがわかる。参加者はおよそ80名、そのうち28名が「地方平和協会の宣言」に署名したと、ジョーンズは記している(史料1の⑤'下線部参照)。

ついで8月19日(月)ジョーンズは明治会堂で平和活動に関する演説を行っている。参加者は500名を越え、そして聴衆のうち数名が、演説終了後、「平和協会の宣言」に署名をしたという(a few of whom signed the Declaration of the Peace Association at the close)。

ちなみに、ジョーンズの報告書にでてくる*The Daily Mail*とは、東京で発行されていた日刊英字新聞*The Japan Daily Mail*のことであろう。東京大学近代日本法政史料センター(明治新聞雑誌文庫)には、1889年1月5日(1774号)から同年6月27日(1911号)までの同紙が所蔵されている。だが、まことに残念なことに、ジョージ・プレスウェイトが二度にわたって書き送ったと思われるジョーンズ関係記事掲載号は現存していない。

ではジョーンズ報告書に出てくる「宣言」(Declaration)とはいったい何なのだろうか？ さらに別の史料で検討してみよう。

「宣言」(Declaration)と「日本平和会入会簿」

既存の研究からこの「宣言」に相当するものとみなすことができるものの一つが、史料3に示した(切り取り式)「日本平和会入会簿」である。¹⁰ただし、引用に際して同「入会簿」の形体(9.3cm×21.4cm)がわかるように枠をつけてみた。

この史料は勝本清一郎が編集した『透谷全集』第3巻に「日本平和会入会簿」として掲載されていたもので、勝本はその「解題」で「日本平和会入会簿」について以下のように解説している。

活版刷入会票廿五枚綴一冊。9.3cm×21.4cm、紙装横綴。日本平和会の唯一人の生存者・フレンド会員石塚伊吉が未使用のまま保存したもの。恐らく世界の孤本であろう。入会票廿五枚のうち四枚だけは石塚が生前に切り取ったので、現存は廿一枚である。(中略)「なんぢ悪に勝る、勿れ……」と「夫われらが戦の器は……」は表紙の裏(表紙の二)に印刷してある語句である。前者はローマ人への手紙12・21、後者はコリント人への第二の手紙10・4である。「日本平和会入会票……」以下は切り取るようになっている入会票の本紙に、〔控へ用〕とことわり書きした部分は控え用に残す紙片に、それぞれ印刷してある。入会票の語句のうち「汝の敵を……詛ふべからず」はやはり聖書からの引用であるが、文字通りの引用ではなく、次の三カ所の語句が入り交っている。ルカによる福音書6・2728「其仇を愛し爾曹を憎者にくものを善よくし詛者のうものを祝しなやむるもの虐待者の為に祈祷せよ」、ローマ人への手紙12・14「爾曹を害ふ者を祝し之を祝して詛ふべからず」、マタイによる福音書5・44「爾曹の敵あだを愛みいつし爾曹を詛のろふ者をを祝ししほ爾曹を憎む者をを善視しよ虐待迫害もの、為に祈祷せよ」。表紙の裏の引用句と合せてこれらの語句は、日本平和会の創立当初の宗教的平和主義思想の拠りどころを示したものである。厳密に言えばこれらの語句は個人生活における平和の倫理を説いたもので、国際的平和を説いたものは一つもない。これらからいきなり「凡ての戦争は主基督の精神に背く」という戦争否定の結論へ行くことには一つの飛躍がある。またのちに機関誌「平和」創刊に際して透谷が書いた『「平和」発行之辞(ことば)』(第一巻二八〇頁)には仏教

や儒教との超宗派的提携の希望が示されてある。これにはそれが無い。この入会簿の制定は加藤萬治（かずはる）の手に成ったものであろう。次の「入会簿取扱ニ関スル心得」は裏表紙の裏（表紙の三）に、「日本平和会規則」は裏表紙の表（表紙の四）に、印刷されてある。後者はのちに「平和」の第十一、十二号にも掲載された。文字の異同は二カ所で、〔 〕にかこんで示したものがそれ。且つ末尾に小活字で「本会本部ヲ仮ニ赤坂氷川町二十番地内ニ置キ事務ヲ掌理ス」という附記が加えられた。氷川町は加藤萬治の住いであつた。「心得」も「規則」も書記である加藤萬治一人を中心にした構造¹¹にできている。入会簿の制定者を加藤萬治とする推定に照応する。（下線は坂口、以下同じ）

そして勝本は

平和協会 英国平和協会員ウキルヤム・ジョンス氏が英国平和会の目的を齎らして我国に渡来し、一場の演説をなせしことは、当時の紙上に其事を記し、且氏が演説筆記をも訳載したることなるが、爾來都下の有志者にして専ら此事のために尽力せらるゝ人出来り、已に会則を頒ち盛んに同志を募集するの運に至りたりと云ふ

（『基督教新聞』第331号、1889年11月29日）

という『基督教新聞』の記事を示し、「この平和協会が日本平和会である。従つて日本平和会の創立は一八八九年十一月である。透谷も石塚伊吉もその創立に際しての有志者の一人で、透谷はのちに委員になった¹²」と述べていた。そしてこの見解が「日本平和会」の創立年月に関する定説として認知されているといつていいだろう。

しかし海外にはもう一つの「宣言」（Declaration）があつた。それが史料4、史料5に示した2種類の「宣言」（Declaration）である。¹³「日本平和会入会簿」と対比しやすいように枠で囲つてみた。

史料4、史料5はいずれもイギリスの地方平和協会の宣言書名簿（DECLARATION BOOKS）と呼ばれるものの模式図で、*Peace and goodwill*（No.1, 1882年4月、12ページの広告）によれば、25枚、50枚、

11 勝本清一郎編『透谷全集』第3巻（岩波書店、1955年）、700～701ページ。

12 同前、702ページ。

13 Swarthmore College Peace Collection所蔵 Microfilm 「Wisbech Peace Association」
（DG 42）

100枚綴りの3種類があり、いずれも横長で小切手帳の形態をとっていた(写真2参照)。

DECLARATION BOOKS for Local Peace Associations always in stock as cheque books, containing 25, 50, or 100 cheques; the largest 1s 10d. each.

写真2

LEOMINSTER TRACT ASSOCIATION. Henry S. Newman, Orphan's Printing Press, Leominster.			
	Per 100		Per 100
*188 Shot Dead	6d.	*229 The Bible better than pistols ..	2s.
*199 Prisoners in Service ..	6d.	*212 Can God protect our lives? ..	2s.
*23 The Lady and the Robber ..	6d.	*222 The unbarred door ..	2s.
*85 A Shield in Trouble	1s.	*39 Second thoughts are best ..	2s.
*114 Is your faith as strong as that of		*12 A bloodless victory ..	1s.
*188 Christmas and War	1s.		
DECLARATION BOOKS for Local Peace Associations always in stock as cheque books, containing 25, 50, or 100 cheques; the largest 1s 10d. each.			
W. EARL, CHURCH TERRACE, WISBECH.			
	Per 100		Per 100
The angry crowd calmed by a text 1/6		Josephus, and it takes two to make	
Peace Principles in practice, No. 1, 1/6		a quarrel ..	1s.
Ditto, ditto, No. 2, 1/6		Dare we take Human Life? ..	1s.
Christianity and the Jews ..	3/-	Saints and the Spahis ..	1s.
The Prize money restored ..	3/-	Lord Byron, &c. Poetry selections 1/	

(*Peace and goodwill*, No.1, 1882年4月, 12ページ広告)

(注) 1s = 1 shilling, 10d = 10 pence

史料4として掲げた「宣言」は、1879年に発足した女性地方平和協会のそれである。一見してその形体ならびに文言が「日本平和会入会簿」と類似していることに気づくはずである。「日本平和会入会簿」そのものはイギリスの地方平和協会のDECLARATION BOOKSを翻案して作られたのではないだろうか。となれば「日本平和会入会票」に記された聖句も日本平和会のメンバー(勝本は加藤万治を想定していたようだが)によって選定され日本平和会独自の活動信条とされたものとみなすよりも、イギリスの地方平和協会、とりわけベックオーバーを中心として組織された女性地方平和協会の「宣言」を翻訳したものとみたほうがいい。準拠した手本が史料5として掲げた1881年以降のものであったなら「仲裁を目的とした国際高等裁判所の設立」という国際平和にむけた具体的な文言が日本の「入会票」にも盛り込まれたことだろう。

ともあれ、勝本が比定したように「日本平和会入会簿」が作られたのは『基督教新聞』に「已に会則を頒ち」との記事が載った1889年11月のことであろう。そうであるならばウィリアム・ジョーンズが同年8月の講演で提示した「宣言」書とは、彼がイギリスから持参した地方平和協会のそれだったにちがいない。

日本における「平和協会」(Local Peace Association)の発足

「宣言」(Declaration)への署名をもって「地方平和協会」発足の起

点とみなすならば、日本におけるそれは1889年8月12日と19日に始まったといわねばならない。かつてイギリス平和協会のコレクター（会員勧誘員）だったジョーンズは、イギリスの「地方平和協会」の会員勧誘方式を使い、12日と19日それぞれの講演終了後、自ら日本人賛同者に対して「地方平和協会」への入会「宣言」書に署名を求めたのである。その際用いられた「宣言」書は、ジョーンズが持参した英語版のそれであったにちがいない。小切手式の「宣言」書に残された日本人署名数は、8月12日に28名、19日にはそれよりも少なかったので数名と報告されたのだろう。そしてこの「宣言」書は、ジョーンズの帰国とともにイギリスのWisbech地方平和協会すなわちベックオーバーのもとに届けられたにちがいない。こうした「宣言」書の入会方式と取りまとめ方を認識していたからこそ、プレスウエイトはジョーンズの「平和講演」とそれを契機とした日本人による「宣言」への署名をもって「日本に地方平和協会が組織されました」（史料2、1889年8月21日付プレスウエイト書簡）と妹のキティに書き送ったのである。そして1889年11月22日付では母マーサに宛てつぎのように伝えていた。

お母さんも当地で平和会が結成されたことに興味があるでしょう。レイチェルたちも関心があるというので英語と日本語で記された規約のコピーを送ったところです。平和会が創設されたのはウィリアム・ジョーンズが最近訪れたことの成果の一つです。まだ会員はわずかですが、次第に増えるでしょう。私は辞退したのですが書記に任命されてしまいました。¹⁴

1889年11月中旬までには日本語の規約や組織体制が整いだしていたことが確認できる。筆まめなプレスウエイトのことである、同じ頃、彼はベックオーバーにも近況を知らせていたにちがいない。1891年5月20日に開催された「地方平和協会提携団体」（Local Peace Association Auxiliary）の年会において、オーストラリアやニュージーランドとともに日本にも「通信員」がいるとの報告がなされていた（史料6 *Peace and goodwill*, Vol. 3 No. 6, 1891年7月15日, 82ページ）。ここにいう「通

14 前掲、尾西康充「北村透谷とG・プレスウエイトーロンドン・クエーカー図書館所蔵資料から」240ページ。

信員」とは、「平和協会」の「書記」に任命されたジョージ・ブレスウェイトその人のことであろう。

こうして日本最初の平和主義講演会によって生まれた「地方平和協会」は、日本人独自のものとして誕生したというよりは、イギリス各地にある「平和協会」としっかり結びついた、日本という地方の「平和協会」という認識のもとで発足したのである。

会則を定め、「同志を募集する」との記事を「基督教新聞」に公表した時点での名称は「平和協会」であった。日本人会員の中心は、この時期あいついでフレンド派の水戸伝道に随行していた加藤万治と北村透谷だったのだろう。目下のところ、いつこの「平和協会」が「日本平和会」と称するにいたったのかはわからない。だがその「同志を募集する」方式＝「日本平和会入会簿」を比較する限り、彼らがイギリスの「Local Peace Association」のそれを翻案・踏襲していたことは明らかである。それだけに日本平和会の「平和」にむけた活動理念、さらには雑誌『平和』での編集方針を考察するにあたっては、イギリスの「地方平和協会」とその機関誌*Peace and goodwill*からの影響、さらには同時代の平和運動に着目することが不可欠となってくる。

3 雑誌『平和』の発行とその論説

ジョージ・ブレスウェイトによる雑誌発行資金援助願い

これまでの研究によれば、1891年秋、加藤万治が『平和』の発行を發議したと説明されてきた。しかし欧米に残された史料によれば、1891年の初め頃にはジョージ・ブレスウェイトが積極的に雑誌の発行にかかわり、それに伴う資金援助の訴えを提起していたことが明らかとなる。その一つが史料7の記事である。

これは*Peace and goodwill*第3巻第5号（1891年4月15日）に掲載

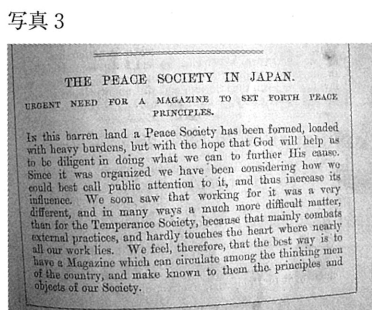


写真3

された「日本における平和協会 平和主義を前進させる雑誌の緊要性」(The Peace Society in Japan: Urgent Need for a Magazine to Set Forth Peace Principles)と題する無署名記事である(写真3)。その内容は、「平和協会」の活動は飲酒をやめるようにと個々人の内面に働きかける禁酒会のそれとは異なり、外的世界との闘いであり、平和協会の主義と目的を広く知らしめるためには雑誌の発行が緊要・不可欠であるとして、その理由8か条を列記するものである。記事そのものには雑誌発行資金の援助を願う直接的な記述はないが、明らかに資金援助への賛同をもとめる筆致である。無署名記事ではあるが、ジョージ・ブレスウエイトによる通信文の一節だと考えていだろう。

二つ目は史料8に掲げた、ジョージ・ブレスウエイトがフィラデルフィアの富豪ウイスター・モリスに宛て雑誌発行資金の援助を願い出た書簡をめぐる一連の議事録である。ウイスター・モリス(Wistar Morris)とはフィラデルフィア・フレンド外国伝道協会会長だったメアリ・モリスの夫で、1890年3月末から4月初めにかけて夫婦で来日していたので、ブレスウエイトとも面識があった。しかしウイスター・モリスは日本からアメリカに帰った後、体調を崩し、1891年3月23日に病死していた。¹⁵史料8-1は、そうした事情を知らないブレスウエイトがウイスター宛てに送った資金援助願いの手紙が、1891年4月20日に開催されたフレンド・フィラデルフィア平和協会(Philadelphia Peace Association of Friends)の会合で読み上げられたことを示すものである。この日、フレンド・フィラデルフィア平和協会は日本における平和雑誌の創刊を援助しようとして100ドルの支出を決めている。

しかし実際に100ドルの送金と受領までには10ヶ月近くかかったようである。1892年2月19日の会合において100ドル送金した旨の報告があり(史料8-2)、同年4月12日の会合で再びジョージ・ブレスウエイトからの手紙が読み上げられ、ブレスウエイトが平和雑誌発行援助金の100ドルを受領したこと、雑誌発行が遅れていたが、第1号が印刷されるところまでできていることが紹介されている(史料8-3)。

筆まめのブレスウエイトは、このフレンド・フィラデルフィア平和協会とのやりとりについてもイギリスに住む母マーサに知らせおり、「最

15 *Friends' Missionary Advocate*, Vol.7 No.5, 1891年5月号にウイスター・モリスの死亡記事がある。

近の郵便で、私が当地で始めようとしている「平和」に対してフィラデルフィアから100ドルの寄付があり、先に受け取ったものと合わせれば3,000円近くに上り、きわめて十分な額になったと思います。」¹⁶（1892年2月25日付け母マーサ宛て書簡）と書き送っていた。フィラデルフィア以外からも相当額の寄附金があったものと思われる。

1889年11月に「平和協会」としての名乗りをあげ、会員募集も本格化させたが、その機関誌『平和』第1号の刊行は2年4ヶ月後の1892年3月15日までずれこんでいた。その理由としてこれまでは、『平和』の編集を担当していた加藤万治が、濃尾地震救援活動のため1891年11月から翌年5月まで岐阜県に出向いていたことにより雑誌発行事務に遅延が生じたものとし、加藤に代わって編集の任を継いだ透谷が主筆となり『平和』の創刊にいたった、とされてきた。¹⁷こうした説明は発行実務を担う人的要因によるものとして理解できる。だが、同時に雑誌発行資金の問題（たとえば新聞紙条例にもとづく保証金の準備問題など）もあったはずである。この点については今後さらに深めねばならない課題といえよう。

雑誌『平和』の論説を読み直す

これまでの雑誌『平和』の研究といえば、『透谷全集』全3巻に収録されたものだけで語られてきた。透谷にとらわれずに雑誌『平和』の全体を考察すること、そのためには『透谷全集』に収録されていない『平和』の論説はもちろん、雑報記事や広告等にも注目しなければならない。¹⁸今回の雑誌『平和』の復刻に伴い、その「総目次」と「索引」が作られた。¹⁹これによっても透谷以外に多くの執筆者がかかわっていたことが明

16 前掲、尾西康充「北村透谷とG・プレスウエイター・ロンドン・クエーカー図書館所蔵資料から」240ページ。

17 佐々木敏二「明治二〇年代の平和運動（一）—日本平和会書記加藤万治小論」（『キリスト教社会問題研究』第30号、1982年）。

18 はやくから雑誌『平和』の書誌的検討を加えていたのが高橋正幸である。本稿も高橋正幸「日本平和会機関誌『平和』に関する考察」（『桐朋学園大学短期大学部紀要』第10号、1992年）に多くを学んでいる。

19 『近代日本「平和運動」資料集成』「解題・総目次・索引」（不二出版、2005年）。

らかとなる。なかでも注目されるのは、雑誌『平和』の「印刷人」であった久野宗熙である。久野は「く、む／む、く／青峰／白菊」など複数のペンネームを用い18点の記事を寄せており最多である。ついで論説数の多いのが河路寛堂で6点、河路（正しくは川路）は「月山学人、寛堂迂夫」という筆名も用いていた。それに次ぐのが渡辺精一の5点である。また、「発行兼編集人」であった加藤万治による署名論稿が『平和』誌上にみられないことも謎の一つである。北村透谷に限らず無署名記事をどのように扱うのかという点については、今後の課題としたい。

そこでここでは「平和と仲裁」というキーワードに着目して雑誌『平和』を読み直す試論を示してみたい。「平和と仲裁」という語句に着目すると、河路寛堂「平和と戦争」（第3号、第5号）、同「仲裁法 The Arbitration」（第7号）、白雲生訳「平和と仲裁 Peace and Arbitration」（第5号）という題目が目飛び込んでくる。さらにウィリアム・ジョーンズの講演筆記である「戦場の実歴」（第1、2、4、6号）も、そもそも彼の世界旅行の目的が「仲裁条約」の締結を国家の要人に訴えるものであったことから、平和運動としての仲裁裁判制度の意義を語るものであった。ここでは宮永孝の研究に依拠して川路寛堂の略歴を紹介しておきたい。

川路寛堂は幕臣・川路聖謨の孫である。幼いときから蘭学・英学を学び、慶応二年幕命によりイギリスに留学したが、二年後、幕府倒壊に伴い帰国、明治4年岩倉使節団に三等書記官として随行し米欧を巡歴した。その後大蔵省に出仕したが、明治10年、官界を退いた。そして明治18年、41歳となった寛堂はすべてを放棄して、芝三田台町三番地に「月山学舎」という英学塾を開いた。寛堂は慶応義塾の福沢諭吉とは旧知であり、同義塾に入学しようとする学生の英語準備になるところから、三田にこの私塾を開いたものらしい。後年、詩人・美術評論家として一家をなす一子の川路柳虹（1888～1959）が生まれたのは、この三田の学舎においてであった（川路柳虹『黒船記』）。

「月山学舎」で英語を教えたのは、明治26年夏までのおよそ9ヶ年である。この年の9月、備後の福山尋常中学校に招かれたので東京を離れている。福山尋常中学校の前身は、祖父川路聖謨在世中の老中・阿部正弘の藩校「誠之館」で、現在の福山誠之館高校にあたる。明治32年（1899）7月から明治36年（1903）1月まで淡路島の洲本に住み、大正3年

5月から大正11年までは神戸の松蔭女学校（聖公会系ミッションスクール）の副校長をつとめ、昭和2年(1927)2月5日、84歳²⁰で死去した。

宮永は兵庫県立洲本高等学校が所蔵する川路寛堂の直筆履歴書を「史料」として紹介しているが、川路自身、明治10年1月から明治26年8月までの経歴を記載していないため、空白となっている。川路が雑誌『平和』に論説を発表していたのは、ちょうどこの「月山学舎」時代にあたる。川路がどのようにして日本平和会と接触をもつようになったのかという点については、他の寄稿者や会員の事例とともに今後追求しなければならないが、『平和』所収論説によって川路寛堂の空白の履歴もわずかながら埋まったといえる。彼の主たる論説は、明らかにイギリスの平和協会が主唱する「平和と仲裁」論を日本に伝えるものであった（史料9）。

『透谷全集』に収録されなかった唯一の「社説」

雑誌『平和』の主筆が北村透谷であったことから、無署名の「社説」であってもそのほとんどが『透谷全集』に収録されたが、唯一収録されなかったものに『平和』第9号（1892年12月26日）の「社説」「コンネクチカット支部第廿六回万国平和会の報告（千八百九十二年八月）」がある。英文目次には「Official Report of the Universal Peace Congress」とあるが、正しくは「Official Report of the Twenty-sixth Annual Meeting of the Universal Peace Union, Mystic, Conn., August 10th, 11th, 12th, 1892」とすべきものであった。この「社説」はUniversal Peace Unionの機関誌*The Peacemaker*第11巻第4号（1892年10月）に掲載された年次報告の一部を訳出したものであった。

Universal Peace Union「世界平和連盟」とは1866年、アルフレッド・ラブ（Alfred H. Love）を会長としてロード・アイランドに組織され、後にフィラデルフィアを拠点とした平和団体で、「たとえ防衛のためであっても全ての戦争は誤りである」（all war, even defensive, is wrong）という確固たる反戦論を信条としていた。1880～90年代にかけて、コネチカット州ミスティクに設けられた平和寺院で年会を開き、毎年数千人の支持者たちが参加していたことで知られている。1889年からほぼ毎年、

20 宮永孝「元幕臣の英語教師 川路寛堂のこと」（『社会労働研究』37巻3号、1990年）。

欧米の主要都市で開催された万国平和会議（Universal Peace Congress）の取り組みを支持し、仲裁裁判条約の締結、アメリカ各地の平和運動団体の連帯を図る団体であった²¹。写真4はスワスモア大学ピース・コレクションが所蔵するUniversal Peace Unionの看板である。

問題は、なぜUniversal Peace Unionの年会報告が雑誌『平和』第9号の「社説」として取り上げられたのかである（写真5）。あくまでも推測の域をでないが、予定されていた「社説」記事が締め切りまでに入稿されなかったため、本来ならば「雑録」や「要報」として扱う予定であった翻訳記事を拡張し、「社説」と名づけて第9号の巻頭に掲載したのだろう。

ここで注目すべきことは、アメリカの平和運動団体の年会記事が、わずか二ヶ月余りの時差でその主要部分が翻訳・紹介されていることである。この記事によって、日本平和会の情報網が単にイギリスの平和運動団体の動向や雑誌*Peace and goodwill*の記事にとどまらず、アメリカの平和運動団体のそれにも開かれていたことが明らかとなる。こうした志向は、たとえ他紙からの転載であっても、一九世紀末の欧米で取り組まれていた各種平和会議（万国平和会議、列国議会同盟）の動向を逐次「雑報」欄に紹介していたこととも一致するもので、今後ともその世界的なつながりを検証する必要がある。

写真4

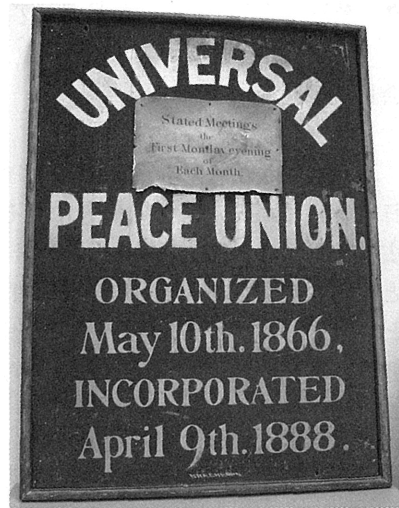
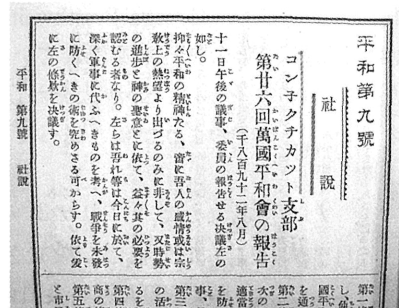


写真5



21 *Guide to the Swarthmore College Peace Collection*, Swarthmore College, Swarthmore, 1981, pp.70-71.

4 雑誌『平和』の終刊と日清戦争

会員の離脱

現在確認されている雑誌『平和』の最終号は、第12号（1893年5月3日発行）である。しかし同号にはそれが最終号である旨の記述はない。広告数を見ると第10号7件、第11号5件、第12号1件と激減していることは明らかである。1893年2月に開催予定であった大会と演説会も中止となっていた。主要会員であった北村透谷も多忙をきわめており、川路寛堂も広島へ行くなど会員動態からも雑誌刊行の困難さが予想される。ここではプレスウエイトの不在にともなう会員の離脱という問題を指摘しておきたい。

1893年から翌年春にかけてプレスウエイトはイギリスに帰省していた。『幕末明治在日外国人・機関名鑑』第16巻1894年（ゆまに書房、1996年、49ページ）にも「George Braithwaite, Agent, Absent」との記載があり、1893年から一年余り日本を離れていたことは明らかである。日本に戻ったプレスウエイトは、無沙汰をわびながら、1895年3月27日、バックオーバーにつぎのように書き送っていた。それが史料10である。

たぶんあなたはウィリアム・ジョーンズの来日を機に、1889年、日本人によって平和会が設立されたことを覚えていらっしゃるでしょう。一時期300人近い会員がいたと思います。しかしその活動はほとんどまったく日本人に委ねられ、そのうちの何人かはまったくの不熱心で、昨年私がイギリスから戻る時までに会員から離脱し、気が付いたときにはほんのわずかしかなかった。これらの多くは単なる名前だけの会員でした。それだけに日清戦争が勃発し試練の時がやってきたとき、彼らは耐えることができませんでした。

1894年8月、日清戦争が勃発すると『日本平和会』は一とたまりもなく消し飛び、芝普連土教会内にも問題が起つた」とは、つとに知られた『基督友会五十年史』の論評である。1894年10月、フレンド教会は日

清戦争の支持・反対をめぐって分裂し、戦争反対派のコサンドたちは1895年7月、「普連土」という名称を用いず、新たに「友会」として²²伝道活動を再組織するという事態となった。

G・プレスウェイトと「大日本平和会」

さらに史料10は、日清戦争中のプレスウェイトによる平和活動を詳細に伝えている。日清戦争のさなか、プレスウェイトは「大日本平和会」(Japan Peace Society)を横浜の自宅(山手14番地、史料10では14 Bluff, Yokohamaと表記されている)に設置し、同規則を発表するとともに、有志数名とともに『平和問題答案平和雑誌』と『聖書平和の教』(The Scripture Testimony Concerning Peace)を日本各地のキリスト教会、貴・衆両院議員に送付したという。このことはすでに『基督友会五十年史』にも記されており、周知のことである。だが本史料の後半部分は新たな事実として注目される。すなわち、かつての日本平和会の会員たちに運動に参加する意思があるかとプレスウェイトが尋ねたところ元会員たちからの返事は運動に参加する気はないというものであった。それでもプレスウェイトは3名の日本人協力者とともに平和雑誌を発行したが、2号まで出したところで新聞紙条例に抵触してしまい、保証金や雑誌刊行経費の目途がたたなくなったため、平和雑誌の継続を断念するにいたった、というものである。これ以降、プレスウェイトが平和運動に登場することはない。本来の業務であるイギリス聖書協会の仕事に専念するが、1899年健康上の理由で聖書会社を辞任。1901年基督教書類会社を設立し、文書出版事業にあたることになる。

日清戦争後、フレンド派では、1897年5月、ジョセフ・コサンドが『基督教と国政』を著し、アメリカでの仲裁条約運動への取り組みを紹介した。²³その2年後、ロシア皇帝ニコライ二世の提唱によりハーグで万国平和会議が開催され、「国際紛争平和的处理条約」が制定され、「常設仲裁裁判所」の取り組みが始まった。しかしこの時、日本にはそれを受

22 日清戦争への対応をめぐるフレンド教会の動向については戸田徹子「日清戦争下におけるフレンド教会の分裂」(『キリスト教史学』第41号)、高橋正幸「日清戦争と普連土教会」(『桐朋学園大学短期大学部紀要』第13号)が詳しい。

23 前掲、『近代日本「平和運動」資料集成』「付録」所収。

け入れる平和団体はなかった。そのつぎなる取り組みは、フレンド派宣教師ギルバート・ボールズの来日と「大日本平和協会」の創設を待たねばならなかった。

むすび

19世紀なかば、欧米において「平和と仲裁」という思想と運動が台頭してきたが、それは多くの主権国家が互いに仲裁裁判条約をはじめとする多国間条約を結び、たとえ国家間に紛争が生じても武力を用いることなく、第三国の仲裁のもとで紛争を解決しようとする国際協調的な秩序作りの運動であった。ウィリアム・ジョーンズの来日は、そうした欧米での運動を日本に伝える第一歩であり、ジョージ・ブレスウェイト主導のもとに組織された日本の「平和協会」は、欧米で進められていた「平和と仲裁」運動をいち早く日本に紹介する窓口であった。その意味では、日本平和会の取り組みは、「平和と仲裁」運動に代表されるヨーロッパ協調的な平和秩序構想の日本への伝播と受容の第1段階だったといえる。日本平和会の会員がどれほどこの「平和と仲裁」運動の理念を理解していたか——その実態を明らかにするためには『平和』誌面の総合的な分析とともに更なる検討が必要である。そしてこののち欧米における「平和と仲裁」運動に関する啓発活動は、ジョセフ・コサンドそしてギルバート・ボールズとフレンド派宣教師に引き継がれていく。日露戦争とフレンド派の対応、1906年に発足する「大日本平和協会」の組織と実態とともにさらに追求していかなければならない課題である。

史料編 雑誌『平和』をめぐる人々

—日本平和会の新史料とともに—

史料1 George Braithwaite 書簡と William Jones の報告書

(1) 1889年8月10日(土)付、母Martha宛て George Barithwaite書簡 (William Jonesの東京での予定を記した箇所を抜粋)

①W. Jones and his wife reached here last 2nd day, they are both of them feeling the heat very much and wish to get away to the mountains as soon as possible, but cannot do so till they have made arrangements about seeing the various members of the Government whom they have come to see. ②Today is Monthly Meeting and W. Jones expects to attend and then ③tomorrow he hopes to attend the morning meeting in Ginza, and the afternoon meeting in the open air at Joseph Cosand's and then ④see the Minister for Foreign Affairs by appointment at ten o'clock on 2nd day morning, find out from him about the other minister and ⑤lecture in the evening on Arbitration at the meeting in Kojimachi.

I hope to get them to go to Nikko for a few days to see the temples there and interest the missionaries in the cause of peace. I also hope they will spend a few days at Mito and give some lectures there. Then last but by no means least ⑥I want W. Jones to give two or three lectures in the Meiji Kwaido, the large hall here. They wish to leave for San Francisco in about three weeks as they wish to attend some of the American Yearly Meeting so they have not much time to spare, however I hope with care they may be able to accomplish all. I am rather sorry they have come just as it is such uncomfortable weather for going about and so many people are away, however inspite of that I hope they will be able to stir up some interest here and start a Peace Society that may continue to work after they have gone.

(2) *The Friends*, 1889年10月1日号掲載 William Jones報告書「Extracts from letter by William Jones」(1889年9月9日、サンフランシスコで投函したものから抜粋)

①'When I first arrived in Tokio, the Cabinet was engrossed with the important work of treaty revision, so that I was unable to see any of the Ministers. Ultimately, furnished with a letter from the British Minister, I succeeded in getting an appointment with Count Okuma, the Minister for Foreign Affairs.

Accompanied by our friend Joseph Cosand, who is the resident missionary of the Philadelphia Women Friends' Foreign Mission Association, ④'I went by appointment to the Foreign Office, where we were pleasantly received by Count Okuma and his secretary, an English-speaking Japanese, who interpreted for us. I gave him an outline of our visit to the Australian Colonies, and of our engagements there, on behalf of peace and arbitration.

(中略)④'The only other minister whom I was able to interview was Viscount Enomotto, Vice-Admiral and Minister of Public Instruction.

(中略)⑤'Our other Peace work consisted of a lecture on "Arbitration," interpreted by one of the Japanese "Friends;" . About eighty persons present, of whom twenty-eight signed the Declaration of the local Peace Association, which we started at Tokio; also ⑥'a public meeting in a large Hall, over 500 persons present, presided over by Dr. McFarlane Ishimoto, said to be the best interpreter in Japan. He interpreted so as to secure the deepest interest in my personal experiences on the part of the large audience, a few of whom signed the Declaration of the Peace Association at the close. ③'I also delivered two Gospel addresses on "Peace," on First-days. The *Daily Mail* (English), also the Japanese press, have given wide publicity to my mission.

There are about thirty-two members of the "Friends'" Society, and ②'we attended with much interest their Monthly Meeting, and their First-day meetings for worship.

- (1) The Library, Friends House, London所蔵「George Braithwaite書簡」(黒木章「透谷がGeorge Braithwaiteに雇われた経緯とWilliam Jonesの平和講演会のこと」『聖学院大学論叢』第16巻第1号、2003年所収④母Martha宛て書簡、139～140ページ)より引用。
- (2) William Jonesの報告書「Extracts from letter by William Jones」(*The Friends*, 1889年10月1日号)。同文の報告書は*The British Friend*, 1889年10月1日号にも掲載されている。
文中の番号と太字部、下線は坂口が付記、強調したもので、対応関係を示している。

史料2 1889年8月21日付妹Kittie宛てGeorge Braithwaite書簡

As a result of Mr. Jones's short visit a Local Peace Association has been formed here, there are only a few members yet but I hope it will spread and grow. Some time this week I hope if possible to get the members together, fix the rules, appoint a Secretary, get everything into working order and set the members to work.

I hope if possible to get the Japan Mail to insert the report of the meeting verbatim but I am afraid it may be too long. They have already twice inserted things about him that I sent.

(前掲黒木章「透谷がGeorge Braithwaiteに雇われた経緯とWilliam Jonesの平和講演会のこと」所収⑤1889年8月21日付妹Kittie宛て書簡、142ページ)。

ジョーンズ氏の短期訪問の結果、当地に地方平和協会が組織されました。その会員数はまだほんのわずかですが、拡大し成長していくものと望んでいます。今週のいつか、会員たちを集めることができるのなら、会則を決め、書記を指名し、あらゆる点においてうまく活動が始められるようにしたいと思っています。

史料3 日本平和会入会簿（勝本清一郎編『透谷全集』第3巻、395～398ページ、岩波書店、1955年）

表紙1（表紙）

日本平和会入会簿
 通常会員年費……………五銭
 “Peace and Good Will”（年四回発）購読者……………三十五銭
 書記、住所姓名……………

表紙2（表紙の裏）

なんぢ惡に^{かな}勝る、勿れ善をもて惡に^{かつ}勝べし。
 夫^{それ}われらが戰の器^{うつは}は肉に属する者に^{とり}あらず宮^{みや}を破るほど神に^{より}由りて
 能^{ちから}あり。

切取り式入会票

日本平和会入会票

余は凡ての戦争は、汝の敵^{あだ}を愛^{いづ}しみ汝を害^{がい}ふものを祝し、是を祝して
 詛^{のろ}ふべからずと宣べし主基督の精神に背くものなる事を信じ、平和
 の主義を拡張するに尽力せんと欲し、茲に署名するものなり。

住所

姓名

〔控へ用〕

日本平和会

住所

姓名

表紙 3 (裏表紙の裏)

入会簿取扱ニ関スル心得

- (1) 入会簿ニ署名スル人々ノ姓名及ビ住所ハ最モ明瞭ニ記載セシムベキヲ
- (2) 入会者ヨリ会費ヲ受取タル時ハ其度々入会簿ニ記載スベキヲ
- (3) 〔以下略－坂口〕

表紙 4 (裏表紙)

日本平和会規則

第一条 目的

本会ハ基督ノ教旨ニ従ヒ平和ノ主義ヲ拡張スルヲ以テ目的トス
〔以下、第十条までであるが略す－坂口〕

史料 4 Declaration 1 : Peace Association Declaration Forms

1879年発足当初のもの

(表紙)

PEACE ASSOCIATION DECLARATION FORMS.

_____ LOCAL PEACE ASSOCIATION.

Members are requested to do what they can to inculcate Peace and Goodwill, and to discourage War.

Subscription to Local Association 1d. per annum

” Juvenile ” $\frac{1}{2}$ d. ”

Collector's Address _____

会員は、平和と親善を教え、戦争を思いとどまらせるため、それぞれがなし得ることに尽力することが求められます。

地方協会への会費 年間 1 ペニー

青少年の会費 年間 2 分の 1 ペニー

会員勧誘員の住所

(記入票)

LOCAL PEACE ASSOCIATION	
Local Peace Association _____	I believe all war, and the preparation for war, to be contrary to the mind of Christ, who says: "Love your enemies," "Do good to them that hate you"; and am desirous to do what I am to further the cause of Peace.
Name _____	Name _____
Residence _____	Residence _____
Date _____	Date _____

私は、全ての戦争と戦争の準備はキリストの意思、すなわち“あなたの敵を愛しなさい”、“あなたを憎む者に親切にきなさい”と説いたそれに反するものだと思っています。そして私は平和主義を促進する取り組みに尽力したいと思っています。

史料4、史料5はいずれも横長で、左から3分の1あたりに切りとり線がある。

史料5 Declaration 2: Wisbech Local Peace Association

1881年以降のもの

<p>WISBECH LOCAL PEACE ASSOCIATION.</p> <hr/> <p>Name _____</p> <p>Residence _____</p> <p>Date _____</p> <p>No. _____</p>	<p>WISBECH LOCAL PEACE ASSOCIATION. OBJECTS AND PRINCIPLES</p> <p>1.—To advocate the settlement of all International disputes by Arbitration and the establishment of a High Court of Nations for that purpose.</p> <p>2.—To place before our fellow-countrymen the danger, immorality, and expense of standing armies.</p> <p>3.—To at all times urge upon our Parliamentary Representative, that in the interests of civilization and humanity, it is the duty of the Government of the United kingdom, to take the initiative in promoting International Peace, by proposing a large, mutual and simultaneous reduction of all armed forces, with a view to their entire abolition.</p> <p><i>I the undersigned, hereby declare my entire concurrence with the above objects and principles, and pledge myself to use every constitutional means to reduce them to practice.</i></p> <p><i>I believe all war to be contrary to the mind of Christ, who says: "Love your enemies,"</i> <i>"Do good to them that hate you, &C.,"</i> and am desirous to do what I can to further the cause of Peace and good-will towards all men.</p> <p>Name</p> <p>Residence</p> <p>No. Date</p>
---	--

- 1、すべての国際紛争を仲裁によって解決することそしてその仲裁を目的とした国際高等裁判所の設立を提言します。(以下、略—坂口)

史料6 Local Peace Association Auxiliaryにみる日本関係記事

6-1 1891年5月20日に開催された「地方平和協会提携団体」(Local Peace Association Auxiliary) 年会での報告から。

The carefully prepared Report shows a united membership of 15,523 to which may be added at least another hundred whose names were not received in time to be included in the reports of the branches. These now number 33, of which 23 are regularly affiliated, having 160 localities under their care besides nearly 430 members in European countries and corresponding secretaries in five of the Australian Colonies, as well as in several parts of New Zealand, and also in Japan.

(*Peace and goodwill*, Vol.3 No.6, 1891年7月15日, 82ページ)

6-2 1892年の年会報告から

The Annual Meeting of the Local Peace Association Auxiliary was the largest yet held, and was very interesting. The report which was presented gives the total members at 15,000, the aggregate of 34 associations, exclusive of the work in Australia and Japan.

(*Peace and goodwill*, Vol.3 No.10, 1892年7月15日, 146ページ)

史料7 George Braithwaiteによる平和雑誌発行資金援助願い(1)

— *Peace and goodwill* 宛て

THE PEACE SOCIETY IN JAPAN

Urgent need for a Magazine to set forth Peace Principles

In this barren land a Peace Society has been formed, loaded with heavy burdens, but with the hope that God will help us to be diligent in doing what we can to further His cause. Since it was organized we have been considering how we could best call public attention to it, and thus increase its influence. We soon saw that working for it was a very different, and in many ways a much more difficult matter, than for the Temperance Society, because that mainly combats external practices,

and hardly touches the heart where nearly all our work lies. We feel, therefore, that the best way is to have a Magazine which can circulate among the thinking men of the country, and make known to them the principles and objects of our Society.

The following are some of the reasons why we feel it is so urgently called for : —

1. To spread the knowledge of the principles of peace through the country, and thus create a wider interest and increase the membership.
2. To stand forth continually as a tranquilizing influence.
3. To show forth the true greatness of peace, and thus check the spirit which has prevailed here for so many centuries, and which gives the highest honours to the warrior.
4. To discourage all military preparations and hasten the time when war shall utterly cease.
5. To imbue the minds of the children of even war-loving parents with the principles of peace, and thus by degrees make the whole nation ashamed of engaging in war.
6. To prepare the way for Arbitration, if occasion should arise, and to convince the people that it is not God's will that His children should fight.
7. To acquaint the intellectual and thinking people here with the opinions of those in western countries, who are labouring in the same cause.
8. To make known the progress of the cause of peace in western countries.

We feel that the best time for the Peace Society to work is while peace is reigning, and not when a nation has been defeated and is thus compelled to sue for peace. If during the time of tranquility the peace principles can be spread an invisible wall will thus rise up, and the mighty hosts will be checked before ever they burst into war.

(*Peace and goodwill*, Vol.3 No.5, 1891年4月15日、無署名記事)

史料 8 George Braithwaiteによる平和雑誌発行資金援助願い(2)

—Wistar Morris宛て

Philadelphia Peace Association of Friendsの議事録より

8 - 1 フレンド・フィラデルフィア平和協会1891年4月20日の議事録

The Sec. read a letter from George Braithwaite written to Wistar Morris, and received after the latter's decease. It appealed for aid for establishing a Peace Magazine in Japan. It was decided to instruct the Executive Committee to pay the \$100. asked for, as soon as the means of Association would warrant it.

Frank H. Taylor Secretary

(Swarthmore College Friends Historical Library所蔵「Philadelphia Yearly Meeting of Religious Society of Friends, Friends Peace Committee, 1891 - 1919」 Series 2, Philadelphia Peace Association of Friends, Minutes & Reports - Executive, Box 9/95)

8 - 2 フレンド・フィラデルフィア平和協会1892年2月19日の議事録

The Tres. was unable to be present and sent the following report:—
“I have received since last report \$8.00, and have sent the \$100.00 to Japan, per draft, payable in gold, drawn by the Girard Trust Co. on Drexel, Morgan Co. of New York City. Geo. Vaux Jr. Tres.”

(前掲Philadelphia Peace Association of Friends, Minutes & Reports - Executive, Box 9/95)

8 - 3 フレンド・フィラデルフィア平和協会1892年4月12日の議事録

The Treas. Read a letter from Geo. Braithwaite, acknowledging the receipt of the \$100.00 sent to Japan to aid in establishing a Peace publication there. He said that the work had been much hindered, but when he wrote it was making good progress, and the first copy of the

paper was soon to be printed.

(前掲Philadelphia Peace Association of Friends, Minutes & Reports – Executive, Box 9/95)

史料 9 雑誌『平和』に納められた川路寛堂の主な論説

9 - 1 平和と戦争 (三号の続) (Peace and war) 河路寛堂

(『平和』第5号、1892年8月28日、「論説」、適宜、句点を附した。下線は坂口、以下同じ)

……先年グラントが米国の大統領たりしときアラバマ号軍艦の事件より英国と戦を開かんとするに際し之を欧洲各国の仲裁に附し英国も亦能く之に同意せしことあり。又日本にても嘗てマリヤルスと云る船に載せたる支那人ことに関しペルウ国と紛議ありたるとき魯西亜帝の仲裁に附したり。是等は彼の悪くむべき恐るべき戦争を避けたる所の所置にして後世に至るまで美事と称するものなり。又欧米各国には一箇人の間に起れる紛議を同胞友人の仲裁裁判に附すこと屢ばなり。宜しく此慣習を拡張し一箇人の紛議は友人の仲裁に附し訴訟の争や決闘の悪弊を止め国と国との紛議は専ら他国の仲裁に附する歟乃至は万国裁判所と云るものを全地球上に二三ヶ所も創立し之をして紛議を判決せしむべきものとす。是れ神の意にも叶ふべき所のものにして人間の幸福を得る好手段と云ふべきものなり。

9 - 2 仲裁法 (The Arbitration) 川路寛堂稿

(『平和』第7号、1892年10月31日、「論説」)

……文明開化と自称する此十九世紀に於て個人の一团隊たる国と云るものと他の国と云るものとの争論を決するに当り (一方が其一己の慾を充さんがため種々の口実を設て争戦を引起す者さへあり) 互の腕力たる干戈銃砲を以て争闘するは何ぞ野蛮的の甚しきものならずや。果して然らば之を改良するには何等の方法なきや。未だ国民と国民との間に於る争論を公判する公設裁判所の此世になきは遺憾なるに拘はら

ず中裁法の法古来より存するあり（此事ハ嘗て余が某青年会に於る演説中にも陳述せし所にして平和の某号に掲載せられたりき）。……若し中裁法の普く此世に行はるゝに至らば国と国との争戦は自ら廃止するに至るべし

9 - 3 廃戦論（How to stop wars） 月山学人稿
（『平和』第10号、1893年1月26日、「論説」）

……今や文明国は互に戦備に汲々として是日も足らざるの勢なるに拘らず若し其国人に向て戦を好む乎と問へば蓋し之を好むと云ふもの実に多くある可からず。然らば輿論は既に戦争を嫌却するの時に達したるものと云ふべきも敢て過言に非るべし。斯る時に当て若し常設の万国講和会を某処に起し各地の平和会より委員を常に派遣し協力同心せば恐らく世上に益すること疑ふ可らず。今年は米国に於る博覧会に際し万国集会とも云ふべきことに至るべきが故此時機を幸として天下の平和を講するの同志乃至は其代表者相会し講和会常置の件等を議するに至らば実に世人の大幸なるべしと信じ之を希望して已ざるなり。然らば駸々歩を進めて吾人の廃戦論も架空の贅言たることを免るゝの日あるべく彼の世人が成り難しと思ひしことも遂に完成を期するに至るべき乎。平和の 君何ぞ廃戦論を佑けざることあらんや。

史料10 1895年3月27日付け Priscilla H. Peckover 宛て
George Braithwaite書簡

14 Bluff, Yokohama

3 mo, 27th 1895

Dear Friend

Priscilla H. Peckover

I have been wishing to write to thee ever since I got back here last spring but not somehow found the opportunity.

I wanted to begin issuing the Peace Magazine again, keeping the work as much as possible in my own hands but from one cause or another I was obliged to put it off. Then when the present terrible war broke out it did not seem wise to try to do very much at least so thought some. When however a Society was formed among the Japanese Christians for collecting money towards the expenses of the war and representative were ~~repre~~ appointed to visit all the churches in the country and urge all the members to give as much as possible I felt it was quite time to do something. Some years since I had John Horniman's Prize Peace Tracts translated into Japanese, also a number of Texts referring to Peace (Published in America as Scripture Testimony Concerning Peace). I therefore had a number of these printed and sent copies to each Church and Preaching Place throughout the Empire. Six or seven hundred copies were thus distributed. Each package contained the twelve Prize Peace Tracts and also the Scripture Testimony Concerning Peace. I received a number of letters of thanks, some wrote saying they were much interested in the subject. I heard of others who were extremely angry. I know however that thou will be glad to hear the Society mentioned above found it necessary to change its programme and instead of collecting money to help forward the war turned its attention to collecting funds to help the sick and wounded and relieve the families of those who were called to serve. I do not know what occasioned this change but anyway it was cause for rejoicing. I also sent a bound volume of the Peace Tracts to each of the members of the Lower

House of Parliament.

Thou probably remembers that a Peace Society was established here among the Japanese in 1889 on the occasion of William Jones's visit. At one time there were I believe nearly three hundred members but the work was left almost entirely to the Japanese and some of them not being very earnest the membership fell off till when I returned from England last year I found very few left. Most of these were only members in name and so when the war broke out and the testing time came they were unable to stand. There seemed no other way therefore but to make a fresh start. I had a fresh edition of the rules printed in Japanese last autumn, also in English and sent a copy to each of the old members with a letter asking them to let me know whether they wished to continue. They all declined. Three new members however joined through the packages sent out to the churches and seen very earnest.

It seemed altogether as though it was really the best time to go forward and so after some difficulty the magazine was commenced again, two numbers were published and everything seemed going on well when suddenly the Japanese editor was called to the Government Office here and was informed that unless Two Hundred and Fifty Mexican Dollars (between £ 25 & £ 30) were at once deposited by him with the Government the magazine would be stopped.

In order to understand this action it is necessary that thou should know something of Japanese Publishing Regulations. All Publications that are issued periodically are divided into two classes, Scientific & Newspapers. We obtained leave for the Peace Paper under the head of Scientific and so were freed from the necessity of depositing money with the Government, at the same time however we were debarred from referring in any way to any current event either here or abroad. The Japanese editor does not seem fully to have understood this and so wrote an article about the late Emperor of Russia, another about Mr. Foster and inserted a letter from the Japanese commander at Port Arther to the Chinese Admiral, all very good from a Peace Standpoint but unhappily sadly transgressing the regulations under which the publication of the paper was permitted by the

Japanese authorities.

They have therefore decided to treat it as a newspaper. The daily newspapers mere have to deposit one thousand dollars, those that are published weekly five hundred dollars and the other two hundred and fifty each. They are then free to publish articles of news and comment upon current events except in particular cases especially forbidden by Government as likely to endanger the Public Peace.

If the Peace Paper was able to be published under this regulation its usefulness would be much increased but I do not myself feel able to lay down the necessary amount. The Japanese editor is very much grieved to have it stopped but I told him there was no other way. He is waiting ready to begin again at once as soon as the way is made for him to do so. I have spent about thirty pounds in various ways in the cause of Peace since I came back and so do not feel able to do much at any rate at present. If the paper is begun again I should like it to be with a fair prospect of being continued in order to do this we ought to have at least £2.10 /— every month sure; this is not counting the amount mentioned above as being necessary for us to deposit with the Government before the Magazine can be issued but which would be refunded expenses we ceased publishing. I have written to Philadelphia about it and thought thou would also like to hear just how matters stood.

I send thee a few copies of the Magazine by this mail, also some copies of the Rules of the Peace Society here.

We had some membership cards printed sometime since I send thee one or two as thou may like to see them. The Chinese characters on the scroll in the dove's mouth stand for Peace; those in the top corners, the one for Love, the other for Righteousness; those in the bottom corners for Peace.

My brother in law Dr. Whitney left here with his family about a month since for England, they hoped to reach London about the 13th of next month. They only expect to stay a few months, their present intention being to get back here before the end of the year.

With much love

I remain

Thy friend sincerely

George Braithwaite

P. S. Thou may have heard of the Orphanage established here several years since on the lines of George Muller's St. Bristol. I send thee a little book published last autumn about it.

Swarthmore College Peace Collection所蔵 Microfilm 「Wisbech
Peace Association」 (DG 42)

※なお、本文中の写真はすべて坂口が撮影したものである。